

# 令和2年度 外国語部会研究計画

## 1 研究主題

コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育

## 2 研究主題設定の理由

社会や経済のグローバル化が急速に進展し、予測困難な時代には、様々な資質・能力が必要となる。特に、急速な社会の変化の中においても、自分のよさや可能性を認識するとともに、他者を尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていく持続可能な社会の創り手の育成が学校現場に求められている。

今年度より全面実施となる学習指導要領では、これからの時代を生きる子供たちに必要な資質・能力を育成するために、「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら授業の創意工夫や充実を目指し、全ての教科等において目標及び内容が次の三つの柱で再整理された。

- ① 何を理解しているか、何ができるか（知識及び技能）
- ② 理解していること・できることをどう使うか（思考力、判断力、表現力等）
- ③ どのように社会・世界とかがわり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）

学習指導要領では、全ての教科等において、これらの目標に準拠した観点で評価をするとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善が求められている。その際、教科等の特質に応じた「見方・考え方」が重要となる。

外国語教育に関しては、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力が、生涯にわたる様々な場面で、これまで以上に必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。平成23年に小学校高学年に導入された外国語活動は、子供たちの活動への高い意欲や中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果を上げた。その一方で、音声中心で学んだことが中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないこと、高学年の発達段階に応じた体系的な学習がより求められていること、学年が上がるにつれて子供の学習意欲が低下すること等の課題が指摘された<sup>1</sup>。これらの成果と課題を踏まえ、学習指導要領では、小学校中学年から年間35単位時間の外国語活動、高学年においては年間70単位時間の教科・外国語が導入されることとなった。このことにより、音声中心の外国語活動から、「読むこと」「書くこと」を加えた教科・外国語への接続を小学校の段階で行った上で、中学校外国語教育への円滑な接続を図ることとなる。

さらに、今回の改訂では、小学校中学年から高等学校卒業時までの一貫した目標と教育内容が明示され、これまで以上に系統的・体系的な指導が求められるようになった。今後、小学校で外国語教育を進める上でも、将来の子供の姿を見通した外国語教育がより一層重要になる。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」及び小学校における「外国語教育の目標」は次のようになっている。

| 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方   |  |  |
|---|--|--|
| 外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること |  |  |
| 外国語教育の目標  |  |  |
|   | 外国語活動（3・4学年）   | 外国語（5・6学年）   |
| 目標  | 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 | 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。   |
| (1) 知識及び技能  | 外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。                   | 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付く、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことについて慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。 |
| (2) 思考力、判断力、表現力等  | 身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。  | コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。      |
| (3) 学びに向かう力、人間性等  | 外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。                      | 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。   |

表の通り、中学年においては、聞くこと、話すことの言語活動を通じたコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を、高学年においては、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通じたコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を養っていくことになる。つまり、目標に示された資質・能力は、言語活動を通して育成されるものであり、今まで以上に言語活動の充実が求められている。ここでいう言語活動とは、実際に外国語を使って自分の考えや気持ちを伝え合う活動のことであり、言語材料について理解したり練習したりするための活動とは区別されている<sup>3</sup>。こうした外国語教育の目標達成に向けて、聞くこと、読むこと、話すこと【やり取り】、話すこと【発表】、書くことに関する具体的な目標が次のように示された。

| 5つの領域別の目標   |   |
|-------------|---|
| 外国語活動（3・4年） |   |
| 外国語（5・6年）   |   |
| 聞くこと        | <p>ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味がわかるようにする。</p> <p>ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。</p>   |
| 読むこと        | <p>ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。</p> <p>イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。</p> <p>ウ ゆっくりはっきり話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。</p>            |
| 話すこと        | <p>ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。</p> <p>イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。</p> <p>ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。</p>           |
| 発表          | <p>ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。</p> <p>イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。</p> <p>ウ 自分のことや相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。</p> |
| 書くこと        | <p>ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。</p> <p>イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。</p> <p>ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。</p>                      |
| 書くこと        | <p>ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。</p> <p>イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。</p>  |

移行期の2年間は、コミュニケーションを図る素地から基礎へのつながりを重視してきた。子供たちの学びや教師の意識等が無理なく中学校外国語につながり、円滑に全面実施に向かうことを目指してきた。今年度からは、活動型で育むコミュニケーションを図る素地となる資質・能力と教科型で育むコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を小学校内でつなげていく必要がある。中学年、高学年で目指す目標や5領域の目標を理解した上で、目標達成につながる実践を行い、それぞれの資質・能力をしっかりと育成したいと考え、本研究主題を設定した。

### 3 研究主題について

コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力とは、外国語活動・外国語で育成すべき資質・能力を指す。この資質・能力を育成するためには、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」それぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要がある。その際に重要となるのが「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」である。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミュニケーションの中で物事を捉える視点や考え方のことである。外国語で他者とコミュニケーションを行うには、社会や世界との関わりの中で事象を捉えたり外国語やその背景にある文化を理解するなどして相手に十分配慮することが重要である。さらに、外国語で表現し伝え合うためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成、再構築することが重要であると示されている<sup>3</sup>。この「外国語によるコミュニケーションにおける、見方・考え方」を踏まえ、コミュニケーションを図る素地・基礎となる3つの資質能力を育成したい。

#### ○コミュニケーションを図る素地となる資質・能力

「知識・技能」では、外国語を通して言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことを目指す。ここでは、日本語との違いや言葉の面白さ、日本と外国との生活習慣や行事の違い、多様な考えがあることなどを体験的に気付き、理解させることが大切である。また、言語を用いてコミュニケーションを図る楽しさや大切さを実感しながら、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるよう工夫したい。

「思考力、判断力、表現力等」では、身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力を目指す。ここでは、子供がよく知っている人や物、事柄を扱い、簡単な語彙や基本的な表現を用いて自分の考えや気持ちを伝え合うようにする。子供がもっている表現がわずかであることを十分に考慮した上で、自分で適切な表現を選び、自分の考えや気持ちを伝えられるよう配慮する必要がある。

「学びに向かう力、人間性等」では、外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。ここでは、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を一体的に育成する過程を通して育てる必要がある。「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し、考えを形成・深化させ、話して表現することを繰り返すことで子供たちに自信が生まれ、主体的に学習に取り組む態度が向上するからである。子供が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて子供たちの主体的に学習に取り組む態度の育成を目指すことが大切である。

中学年では、初めて外国語に触れる段階であることを配慮し、外国語を通してコミュニケーションを図る楽しさや、異なる文化をもつ人々との交流等を通して世界には様々な言語や文化があることを知る楽しさを実感させたい。また、中学年の外国語活動で音声によるコミュニケーションを十分に図っておくことが、高学年以降の外国語学習の動機付けになることを心に留めておきたい。

#### ○コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力

「知識及び技能」では、音声面や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことについて慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けることが目指される。高学年の外国語では、日本語との音声の違いにとどまらず、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付き、その気付きを外国語でコミュニケーションを図る際に活用し、生きて働く知識として理解することが求められている。

「思考力、判断力、表現力等」では、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基本的な力を養うことが求められる。ここでは、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識した上で、子供がよく知っている人や物、事柄について推測して聞いたり、表現を選択して話したり、音声で慣れ親しんだ語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことが重要になる。中学校において日常的な話題や社会的な話題を外国語で伝え合うことができるようにするためには、小学校段階で身近で簡単な事柄について十分にコミュニケーションを図っておくことが必要である。

「学びに向かう力・人間性等」では、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことを目指す。この観点は、極めて重要な観点として挙げられている<sup>4</sup>。子供たちが、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付けるためには、言語活動に主体的に取り組むことが不可欠だからである。活動型同様、「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し、考えを形成・深化させながら話したり書いたりする活動を繰り返すことで、子供たちの自信につなげ、主体的

に学習に取り組む態度の向上を目指したい。

高学年の外国語では、「聞くこと」「話すこと」については定着が求められ、「読むこと」「書くこと」の内容が取り入れられる。子供が負担に感じることのないよう、実態に合わせた活動内容を考えたり、相手意識、目的意識を明確にもたせたりして、外国語を学ぶ楽しさや意義を実感させたい。活動型で培ったコミュニケーションを図る素地となる資質・能力の上にコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力をしっかりと育み、中学校外国語の礎としたい。

なお、中学校では令和3年度より新学習指導要領が全面実施される。今年度小学校を卒業した子供たちは新たな中学校外国語の授業を受けることとなる。このことを念頭におき、今年度の取組をより一層充実させる必要がある。

## 4 研究の内容

### (1) 各校の実態に応じた年間指導計画等

学習指導要領において外国語科では、「外国語科の目標」と「五つの領域別の目標」が示されている。これらは、高学年の2年間を通した目標となっているため、各学年ごとの目標と五つの領域別の目標を各校の実態に応じて設定することになる。後者は、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標のことである。目標に応じて学年ごとの評価規準を設定することになるが、その際には、文部科学省や国立教育政策研究所から示される例を参考にするとよい。これらを受けて、単元ごとの目標・言語活動・評価規準を設定し、実践していくこととなる。

今年度より、高学年では検定教科書を使用することとなる。教科書会社の指導書には、年間計画等も示されるであろう。しかし、それをそのまま使うのではなく、年間を通して育てたい子供の姿を明確にし、子供の実態や地域・学校の特色に合わせて単元の配列を考えたり、工夫したりする必要がある。さらに、子供の学びを滑らかにつなげ、前年度の活動内容を踏まえた効果的な年間指導計画の作成が求められる。目標達成に向けて、子供の意識の流れや実態をしっかりと把握し、今までの外国語活動で培ってきたよさを生かしながらカリキュラムマネジメントを行い、他教科・領域等との関連や行事等、各学校や地域の特色を生かした効果的で無理のない計画を立てることが大切である。その際には、主体的・対話的で深い学びの実現が図られているか、簡単な語句や基本的な表現を用いながら、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動が盛り込まれているかについて確認したい。

### (2) 目指す資質・能力を育成する授業の在り方

#### ○言語活動の充実

学習指導要領では、言語活動の充実が求められている。ここでいう言語活動とは、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、実際に外国語を使って自分の考えや気持ちを伝え合う活動のことである。

中学年において言語活動を充実させるためには、子供が興味・関心をもつ題材を扱い、聞く活動を十分に取り入れた上で、必然性のある体験的な活動を設定することが大切である。中学年において十分に聞いたり話したりする経験をしておくことが、高学年の外国語科における五つの領域の言語活動につながるものとなる。

高学年においては、中学年の外国語活動での学びを生かした言語活動が展開される。単に繰り返し活動を行うのではなく、子供が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題を設定し、その目的を達成するために、必要な表現を選択して活用できるようにすることが必要である。

なお、自分の気持ちや考えをやり取りする言語活動は、単元終末のみに行うのではなく、単元全体を通して行っていくことが大切である。

#### ○Small Talk

研修ガイドブックによると、Small Talk の主な目的は二つある。①既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、②対話の続け方を指導すること、である<sup>5</sup>。

高学年で行う外国語では、「聞くこと」「話すこと」において定着が求められる。指導者や子供が自分自身に関する本当の出来事や気持ちなどをやり取りする中で、子供が現在学習している単元及びこれまで学習した語彙や表現を繰り返し使用する機会を保障し、一層の定着を目指す。また、「話すこと」のコミュニケーションを行う際に欠かせないのが「対話を続けるための基本的な表現」である。対話の開始や終了の挨拶、繰り返しや一言感想、確かめたり質問したりする表現を繰り返し使用することで、自然なやり取りができるようになると考えられる。

また、うまく伝わらなかった言葉や表現などを全体で共有し、既習の言語材料から使える表現を導き出したり、別の言い方を考えたりする時間をもつことが必要である。さらに、自分の対話を振り返ったり、相手を変えて自己調整しながら繰り返したりすることも大切である。

なお、Small Talk をする際には、子供の実態に合わせ、指導者同士、指導者と子供、子供同士等の段階を考慮する必要がある。

## ○文字を扱った活動

「読むこと」「書くこと」については、活字体で書かれた大文字・小文字を識別し、その読み方を発音したり書いたりすることの定着が求められる。また、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現について、意味がわかるようにすることや、語順を意識しながら書き写すことなどを行うこととなる。読んだり書いたりする活動をする際には、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を扱うことに十分留意する。

子供が主体的に読んだり書いたりしようとする「学びに向かう力、人間性等」を育成するためにも、自分自身や友達のことなど、簡単で身近な事柄について、目的をもって読んだり書いたりする活動を取り入れることが大切である。同時に、子供が過度な負担を感じないように、スモールステップで取り組むことが重要である。また、「書くこと」については、英語の語順に気付いたり、語と語の区切り等に注意して英文を書き写したりすることができるよう配慮する必要がある。

文字を扱う際には、音声中心の活動の中に文字に触れる場を設定する等、子供たちが文字に親しみ、読んだり書いたりすることに自然と気持ちが向かうような工夫が必要である。活動の意味や目的をしっかりと理解させた上で、音声に十分に慣れ親しみ、必然性を感じているものについて丁寧に指導したい。

なお、「読むこと」「書くこと」に関して、困難を感じる子供がいることも想定されるため、個に応じた教材の工夫や支援が望まれる。

## ○評価

『学習評価の在り方ハンドブック』によると、学習評価のあり方については、次の三点が基本となる。

- ①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ②教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③これまで慣行として行われていたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

また、学習評価の基本的な枠組みは、

図1のようになっている<sup>6</sup>。

「知識・技能」では、英語の特徴やきまりに関する事項を理解しているかどうか、それらを実際のコミュニケーションにおいて、活用する技能を身に付けているかどうかを評価する。学習初期段階においては、努力を要すると判断される状況になりそうな子供を見出し、おおむね満足できる状況となるよう適切な指導を行うことが大切である。

「思考・判断・表現」では、子供がコミュニケーションの目的や場面、状況などに応じて、既習語句や表現を使って、話される内容を理解したり、自分の考えや気持ちを表現したりしているかどうかを評価する。そのため、学習過程において、普段から指導者と子供、子供同士で既習語句や表現を使って常にやりとりする場面を設定しておくことが大切である。

「主体的に学習に取り組む態度」では、子供が英語を使って自分の考えや気持ちを伝え合うことの楽しさや言葉の大切さを実感しながら粘り強く学習に取り組み、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を身に付けているかどうか、また、将来英語が必要な場面で自ら英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けているかどうかを評価する。したがって、挙手の回数など、形式的な側面で評価をするのではなく、学習過程において自己調整を行っている側面を捉えて評価することが大切である。つまり、本観点においては、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行うこととする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価することが求められる。また、本観点の評価の場面は、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点に関わる評価の場面と同時とし、本観点のみを取り出での評価は行わない。さらに、学習活動を通して身に付けた態度を評価するため、単元の導入時に評価したり、1単位時間の授業の冒頭で評価したりすることは適さない。

「外国語活動の記録」については、評価の観点を記入した上で、それらの観点に照らして、子供の学習状況に顕著な事項がある場合にその特徴を記入するようになっている。しかし、教科となった高学年外国語では、他教科同様、観点別学習状況の評価と、これらを総括的に捉える3段階の評定を付けなければならない。そこで、高学年においては、「内容のまとめり(五つの領域)ごとの評価規準」や「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標を踏まえ、単元(題材)における観点別学習状況の評価をすることになる。

方法としては、従来の振り返りカードの分析や行動観察に加え、パフォーマンス評価(インタビュー、発表、ワークシートや作品等の評価)等がある。多様な評価方法から子供の学習状況を評価できる方法を選択し、多面的・多角的に評価することが重要となる。子供たち自身が自らの

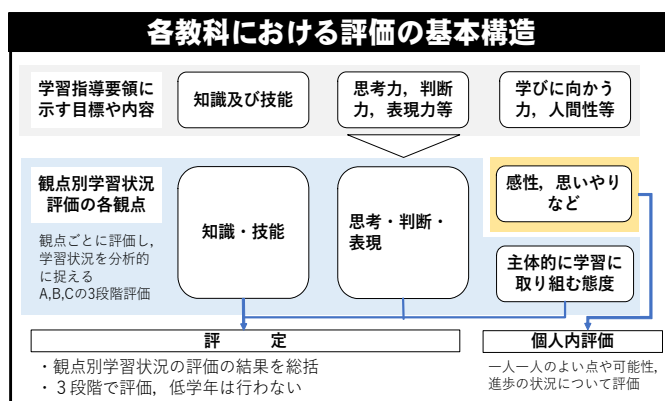


図1:学習評価の基本的な枠組み

学びを振り返り、次の学びに向かうことができるような評価にするために、指導者は、「何のための評価なのか」を再確認し、授業のねらいがどこまで達成されたかだけでなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長し、より深い学びに向かっているかを捉えることが大切である。指導者によって評価の捉え方に偏りがないうように、何を、どこで、どのように評価するのか、研究を進めるとともに共通理解を図る必要がある。なお、評価・評定に関しては、今後とも、国の動向に注視しつつ研究を進める必要がある。

### (3) 接続と連携（中学年・高学年，小・小，小・中，小・中・高）

学習指導要領の下では、小中高の目標や内容の系統性が図られた。今後、小学校内では外国語活動と教科・外国語の接続がなされることとなる。中学年では、活動内容がどのように高学年の教科につながるかを意識して授業をすること、高学年では、どのような活動内容を経て今に至るのかを知った上で授業を進めるようになる。同時に、中学校との連携はこれまで以上に重要になると考える。小学校においては、中学校の授業内容にどのようにつながっていくのかを意識し、中学校においては、小学校でどのような内容に取り組んできているのかを理解することが必要となる。

子供たちの学びをスムーズにつなげ、学習内容の定着を効果的に進めるためにも、グローバル社会の中で生きる子供たちの将来を見据え、指導者が共通の目的意識をもつためにも系統性を図ることは大変重要である。まずは近隣の小学校間で、そして地域の小・中学校間で授業参観や研究会を通して情報交換を行い、連携を進めていきたい。さらに、学習指導要領が示す目標に沿った授業づくりについて各校が実践研究を進めるとともに、交流を続けることで互いの理解を深め、将来的にはそれらを共有し、外国語教育における学校間の円滑な接続について検討していくことが大切である。連携は一朝一夕にできるものではないが、管理職や教育委員会のリーダーシップの下、進めていく必要がある。

## 5 研究の進め方

- (1) 各郡市の実態に応じ、個人または協同で研究を進める。
- (2) 研究した内容を研究集録にまとめる。
- (3) 夏季研修会で実践的な研究を深める。 8月 5日 開催

### 引用・参考文献

文部科学省：小学校学習指導要領解説 外国語活動編・外国語編(平成29年6月)

文部科学省：小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック(平成29年6月)

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会：

児童生徒の学習評価の在り方について(報告)(平成31年1月)

文部科学省：小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要領の改善について(通知)(平成31年3月)

国立教育政策研究所：学習評価の在り方ハンドブック(令和元年6月)

- 
- 1 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック p12
  - 2 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック p23
  - 3 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語 p11, p67
  - 4 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語 pp15・16, p73
  - 5 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック p84
  - 6 [http://schit.net/tesk/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=2061](http://schit.net/tesk/?action=common_download_main&upload_id=2061) より一部編集